
短編集

築島 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N5216BA

【作者名】

築島 涼

【あらすじ】

一話完結の短編小説集。暗かったり明るかったりパラレルワールドだったり現代のお話だったりジャンルは様々になると思います。じわじわ増えるかも。

とある少女の話

高校2年の冬。

時期的に言えば高校生活の折り返し地点も過ぎて、そろそろ将来について考えなければと大半の生徒が思う頃。いつもと変わらぬ日常の隙間に生徒達のそんな思いが見え隠れする時という程憂鬱な時はないだろう。学生達は各々で自分自身について考え、それを周囲に悟られぬように演技をする。進路という悪魔など最初から存在しなかったのだというようにいつもの日常を演じるのだ。

そんな憂鬱感が仄かに香る高校2年の冬。

一人の少女は何の感情も籠らぬ目で、突然降って湧いた、いつもより少しだけ色がついた日常の発端を見つめていた。

その発端とは携帯が受信した一通のメール。差し出し人は中学時代の友人からで、久々に皆で遊ばないかという内容だった気がするが、少女はメールの文章を一字一句把握出来る程覚えてはいない。

ただメールの文章を見て彼女が最初に思った事は、このタイミングでかつての中学校の仲間と久々に再会するということは、やはり話題は進路の事だろうか。それとも年頃の女子らしく恋バナに洒落込むのだろうか。そんなような事だった。

結果として少女はその瞳に一度として感情の色を見せる事なくメールを見つめてから、簡単な生返事を送信し、ぱたりと携帯電話を閉じてしまった。

……プチ同窓会か。

学年が上がってしまっただけからは、お互い自分の進むべき道を歩む為に忙しくなる。

ならばその前に、一度くらいは顔を合わせて語らおうではないかという事なのだろう。

友情を確かめ合いたいのか、ただ単に現実に対する愚痴が言いたくなったのか。それとも本当に久々になる顔を見たいと思ったのか。

相手の真意はわからないが安易に想像出来る複数の理由にも彼女はさして気にする様子もなく、ただ暇だったから、そんな理由で生返事ではあるが参加の意を示したメールを作成し、送信した。

少しばかりのお洒落として履いてみたブーツが、アスファルトの上でコツンコツンと音を響かせる。そしてその音は都会の雑踏と簡単に混ざりあって溶け込む。

都会の雑踏にあっさり溶け込まれてしまう自分自身の足音を聴いていると、まるで自分の存在までもが街そのものの中に溶けてしまったかよう。それこそ空気のように、そこにあるのが当たり前のように。

しかしそんな感覚に囚われる彼女がこの場所を訪れるのは初めての事で、彼女は彼女を意図も簡単に受け入れた街の姿に少々の戸惑いを感じていた。

これだけの人間がいる中で、中学の友人達は自分の存在に気が付いてくれるだろうか。

人と人がひしめき合う都会のと真ん中。一人待ち合わせ場所に佇む少女は思う。

それから数分後、数人の友人達が現われた。

欠々に見る顔はどれも昔の面影を保ったまま変わってはいなかったが、その上に塗りたくられた化粧が酷く邪魔だと思った。昔よりも随分と明るい髪色になった友人達の毛先は痛みが酷く、ぱさぱさだ。

昔のままの方が良かったな。

危うい事にそんな本音を本人達の前で口走りそうになったので、

少女はその言葉を喉の奥へと押し戻しつつ、傍らで愛想の良い笑顔で再会を喜ぶ言葉を紡ぐ。

「久しぶり」

「元気してたあ？」

「アンタ変わってないね」

「へえ、染めたんだ」

「ねえねえ聞いて、アタシ彼氏できたんだよー」

そして友人達は思い思いの言葉を交わし、一通り挨拶を終えると、今度は意気揚々と昔話や自分の近況について話しだした。

人間とは、分かりやすい生き物だと少女は思う。自分が大好きなくせして、自分が知りたいと思つた事は他人の事でも貪欲と思われ程に知りたがる。

だから再会した友人達もその人間本来のマニユアル通り、他人の学校生活を知りたがり、同時に自分達が今まで経験してきた学校の生活を話したがつた。

少女はそんな話を淡々と聴き、何か言葉を口にする。端から見ればそれは会話が成立しているようにも見えるが、実際のところ、少女は彼女らの話をただ聞き流して適当に相槌と思われる言葉を垂れ流しているだけだった。

少女は友人の近況など別に知りたいとは思わなかった。もしも相手に近況を尋ねればこちらも自分の事を話さなければならぬからだ。自分の話はしたくなかった少女は、あくまでも傍観者、傍聴者の立場にいたかったのだ。

それならば何故この場所に来たのかという疑問が浮かび上がるが、それは単に「暇だったから」というたった一言で片付けられてしまっただろう。

少女はそんな、少しだけ何か欠けた人間だった。矛盾した人間

だった。そして少女自身はそれをほんの少しだけ自覚していた。

思い思いの服で自分を飾り、幼さを残しながらも大人の雰囲気
飲み込まれつつある友人達の話に少女が耳を傾けると、ふと、この
場にはいない友人の噂話を耳にした。

「……○○ちゃんさ、妊娠、したんだって」

年齢16か17の年頃の少女達にはあまり似つかわしいとは言えな
い会話。友人の一人は言葉を続ける。

「○○ちゃんとバイト先同じなんだよね。だから聴いたんだけどさ、
あの子高校辞めた後、かなり荒んだ生活してたみたい」

友人の一人が重たい表情でそう言葉を紡ぐのを見て、少女は純粋
にその○○ちゃんが可哀相だと思った。これが同情と呼ばれる感情
なのかは分からない。ただ単純に、報われない人生や世の中に翻弄
される彼女が可哀相だと思った。

そして周りにいる友人達も自分と同じ事を思っているのだろう。
少女はそう思い込んでいた。

「まあ仕方ないんじゃない？」

「だってもう17だし」

「そういう事もあるでしょ」

しかし友人達は、彼女に可哀相という同情心の欠片すら見せずに、
明るい笑顔で それこそ、何か面白い話でもされて笑っているか
のように あっさりと、それでいてばっさりと、冷酷とも言える
言葉で斬り捨てたのだ。

その明るい声色は少女の鼓膜を震わせる。決して侮蔑するような
色は含んでいない筈の声は、不思議なくらいに冷たい。

そして少女は身体中を駆け巡る寒気と驚愕の存在に気が付いた。

同情すらされない友人。それは最早友人と呼べる者などではない。そんなの、ただの赤の他人に過ぎないではないか。

変わっていかないように思えた筈の彼女達は変わってしまったのだ。彼女達は、誰だろう。

高校で自分を苛めている人間の顔が少女の脳裏を過ぎる。目の前で笑うかつての友人の笑顔は、自分を見下して笑う高校の人間達のそれと、良く似ていた。

結局少女はその小さな同窓会で進路の話をする訳でも、自分が苛められている事を告げる訳でもなく、ただ虚しく続く日常へと戻って来た。

人間は無情にも変わる。変わらざるを得ない。昔の自分だったら喜んで受け取れていた筈の同窓会のメールを見て嬉しくも悲しくも何も感じなかったのと同じように、彼女達だって静かに変わっていくのだ。

変わらないようで変わっていく虚しい日常は、今日もまた続いていく。

「……………どうしてこうなっちゃったんだろ」

そんな日常を見つめて、少女はどうしようもないこの世界をただ嘆くしかないのだ。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5216ba/>

短編集

2012年1月14日13時53分発行